

## 第10期県民生活審議会 第1回総合政策部会（概要）

- 1 日時 平成26年6月19日（木）13：30～15：30
- 2 場所 ひょうご女性交流館501会議室
- 3 出席者 委員：鳥越会長、小西副会長兼部会長、岩木委員、大前委員、木田委員、北川委員、北野委員、玉谷委員、野崎委員、服部委員、森委員、山口委員、山崎委員、吉田委員  
県側：藤原政策部長、横山企画県民部参事、柳瀬県民生活局長、  
 洲上県民生活課長、木村協働推進室長、中田県民生活課参事、  
 久戸瀬県民生活課副課長、県民局・県民センターほか関係職員

### 4 内 容

#### (1) 政策部長挨拶

- 本日は大変お忙しい中、総合政策部会にご出席いただき、お礼申し上げます。
- 阪神・淡路大震災から20年目を迎えようとしており、被災地域の約4割の方が震災を経験しておらず、震災の経験や風化が懸念されているところである。
- その間に私たちは、地域団体やNPOが、地域活動や市民活動の担い手として重要な役割を担うことや、地域づくりは多様な主体の参画と協働のもとに進めていくことが大切であると学んだ。
- 南海トラフ巨大地震の脅威が迫っていることもあり、この1年は「伝える」「備える」「活かす」の3つをスローガンに掲げ、兵庫県に根付く災害文化をさらに発展させていきたいと考えている。
- 今、グローバル化や高度情報化といった非常に大きな波が来ており、超高齢化社会や人口減少社会も到来している。これから地域コミュニティが抱える課題が非常に多様化してくると考えている。
- 国土交通省が3月に発表した「国土のグランドデザイン」骨子によると、2050年には現在の居住地の約6割で人口が半減し、その内2割は居住者がいなくなるなどの試算も出ている。あくまで一定の仮定のもとでの試算であるが、今のままでは地域コミュニティが消滅してしまうのではないかとの危機感を抱いている。こうした中、地域の人々の結びつきを深め、地域内外の交流をさらに進めていく取り組みが必要であると考えている。
- 第9期では、家族や地域の絆、地域の資源を背景に育まれる“ふるさと意識”と暮らしの中での“ふるさと”のための活動の重要性を提起いただき、これを踏まえ、県としても、昨年度から知事を本部長とする「ふるさと事業推進本部」を設置し、ふるさとづくりを総合的に推進している。
- 第10期では、ふるさとづくりの活動をより一層広げていくための具体的な方策の検討をお願いしたいとのことで、2月の全体会で、貴重な視点でのキーワードをいただいた。今後、部会でさらに議論を深めていただき、ふるさとを軸に新たな骨太の政策形成を進めていきたいと考えている。
- 本日は、限られた時間ではあるが、忌憚のないご意見をいただき、実りの多い会議となることをお願い申し上げます。

## (2) 審議事項について

### (部会長)

- 第9期では「ふるさと意識」と「ふるさとのための活動」の2つを要素として、それらが互いに循環することが重要との考えを提唱した。
- 今期は意識と活動の相互サイクルが促されるためのしかけや、ふるさとづくりが広がるための具体的な方策について、全体会でいただいたご意見を踏まえ、この総合政策部会で審議していきたいと思っている。
- また、県民の参画と協働の推進に関する条例や、県民のボランティア活動の促進等に関する条例に関して、それぞれの指針等を作成する際には、適宜委員の皆さまのご意見をいただきたいと思うので、ご協力をお願いしたい。

### (事務局説明)

- 事務局から資料に基づき説明

### (部会長)

- 資料については、全体会でいただいたご意見をまとめたものである。
- 全体会は、我々だけではなく、消費生活部会の委員からもご意見をいただき、資料にはそれも反映している。
- 具体的にわかりやすいように、県内で実際に行われている実践活動を取りまとめている資料もある。
- ここまでの説明について、ご質問・ご意見などをいただき、そこから先に進めたい考えている。

## (3) 意見交換

### 〈これまでの審議の振り返り〉

- 第10期は、第6期～8期の繰り返しのような気がする。それをもう1度簡単に振り返って、その流れの中で、今期のふるさとづくりをどのような視点で取り組まなければならないか、明確にしておいた方がいいと思う。ぼやっとして、どうやって深めていけばいいか見えにくい。
- これまでをまとめると、地域、コミュニティ再生の第7期、社会的孤立を課題としたコミュニティづくりを融合した第8期、そして、キーワードとしてのふるさとづくりという言葉が、各方面で集約出来る分かりやすい言葉という意味で、「兵庫のふるさと」という形で出てきたと受け止めている。

### 〈現状認識〉

- コミュニティの現状はかなり厳しくなっている。地域づくりはとても大事だし、これまでもいろいろな活動があったが、それによってコミュニティが救われた事例は少ない。そうした活動があってもコミュニティは荒廃している。だから、私たちはどうやって立ち向かわなければならないかを、もう少しシビアに考えた方がいいのではないかと思う。
- ため池の草刈りなど地域のことはすべて高齢者がしている。仕事がないことで経済的にも疲弊している。人もモノもお金も、小さな田舎の経済が大都市に吸い上げられてしまった。そのような中でどうやって地域が自立していかなければならないか。日本全体の課題だと思っている。

- 最初は農村、漁村だったまちが、そうした人たちが高齢化して、子どもたちは後を継いでくれず、田んぼが重荷になって、どんどん田んぼが家になっていった。これから日本の農業はどうなっていくのかと思う。

### 〈ふるさとの定義〉

- 問題なのは、はっきりと整理されておらず、ぼんやりとした中でふるさとをイメージしようとなっていること。委員によってイメージされていることが違うので、ある程度共通のイメージを持って議論した方がいいと思う。
- 全体を見て、50年ぐらい前の時点から見ている話の感じがする。これまで議論されたことを「ふるさと」という言葉にまとめてしまえば、中身の話が直接伝わらず、ふるさとづくりという少し甘い言葉に引っ張られてしまい、このような話になっているのではないか。
- ふるさと意識という言葉が非常に情緒的なのは気になるが、ふるさと意識が何なのかという確認は、そこそこされたかと思う。ふるさと意識とここで言われているものは、住んでいる地域に自分も暮らしも影響されていて、自分も影響を与えているという自覚と、そこに関与している実感のようなものと捉えている。情緒的なものが混在してくると何を話しているのか分からなくなる部分があるので、その辺りをきちんと明文化して書く必要がある。
- ふるさとという言葉が曖昧に聞こえるのは、今の社会の背景が謳われていないからではないか。社会全体の今の現象だけをとらえてこうあるべきだというのは、つぎはぎの政策でしかない。

### 〈地域への愛着や誇りを育てる〉

- いろいろな取り組みの1つのポイントは自発的かどうかだと思う。県や地域から言われるのではなく、自発的にというところまで持っていくのが重要であり、そのためには、自分の地域に誇りを持つことが大事である。
- 小さい頃から、誇りを持つような意識づけをすることが1つの手だてとしてある。上から押しつけるのではなく、自分で兵庫のすごいところを探しに行くといった取り組みをすれば、自分で探したことは身に付くので、兵庫県に誇りが持つのではないか。
- 若者は、学校や社会で勉強することが役立つのは都心部でしかないと思っており、自分が必要とされているのは都心部だと勘違いしている。地域の中で役立つものを教育の中に取り入れていかなければいけない。
- 日本人は、基本的に農耕民族であったことを忘れてはならない。そのことと、50年前、子どもたちがどうやって地域で遊んでいたかということも、もう1度、今の子どもたちに教えていかなければならない。地域の力で地域を元気にし、地域の子どもを育てていかなければならないということが原点にあるのではないか。

### 〈新しい価値観〉

- お金がなくても生きていけるといった話があったが、若い人たちは、そういった生き方そのものを面白いととらえている。私たちの考えと若者の考えているふるさととは違う気がする。
- 若者は、今までみたいに用意されたものの中で生きていくのではなくて、手間

のかかることの過程をすごく楽しんでいる。そこで自分が生きている感覚、自分の存在価値を求めているというのを、若い人たちの姿を見ていて思う。

#### 〈外の人や弱者を包み込む〉

- 就労弱者の方々を対象とした職場をつくっているが、はっきりと目的を持って立ち位置、役割を持つことがすごく大事であり、こうしたコミュニティビジネスを生み出す中で、ちゃんと役割分担が出来ることは素晴らしいと感じた。ふるさとづくりを検討し、政策提案していくことを考えた時に、このようなシステムづくりが必要ではないかと思う。
- ふるさとを必ずしも古い昔の懐かしさでは見ないこと。新しく移住してこられた方にも入っていただくような、動きとしてのふるさとが必要ではないか。
- 総合政策部会が一環して、ここ数年間意図してきた弱者に対する配慮は、兵庫県のふるさとづくりの中で抜いてはいけないと思う。子ども、若者は元気なだけでなく問題も抱えている。孤立という面も確実に存在しているから、こういった弱者の問題を抜きにしたふるさとづくりはまずいと思う。

#### 〈ともに地域を運営する〉

- 多世代がふれあう時に一番大事なキーワードは、それぞれに役割があることだと思っている。
- 活動の際、テントを借りる時は、学校ではなく自治会に頼む。企業から段ボールをもらう時は、社長を知る人に一緒に頼みに行ってもらう。そうすることで、関わった人たちは気に留めてくれて、活動を見に来たり、手伝ってくれる。そうして人を巻き込んで頼むことで、みんなが活動に関心を持ってくれるようになる。
- 若者に、ただいて欲しいとか、自分たちの世代がめざすことをして欲しいなどといったところに偏ってしまうと、若者は必要とされていないように感じてしまう。若者の意見を聞いたり、イベントを任せることはあるが、まちづくりを任せるのはあまりなく、人手扱いをされることがすごく多い。
- 自治会や地域の組織の下ではなく、若者が自分で動いて責任をとるという仕組みづくりを始めてはどうかと思う。
- 40歳から65歳ぐらいの地域での働き盛りの人が、みんな企業での働き盛りになってしまうから、本当に地域で働けるのは65歳から80歳ぐらい。そのような人たちがすることがないのは大変もったいないと思う。
- 他人のことを配慮してもものが言えるかがふるさとづくりのポイントかと思う。

#### 〈ガバナンスについて〉

- ガバナンスという言葉は統治だから、ちょっときつく感じる。むしろマネジメントぐらいの方がいいかなと思う。
- ガバナンスという言葉自体は慣れ親しんでいないかもしれないが、協働統治といったもので、協働でやりましょう、といったイメージのものである。
- マネジメントに戻して、そこからもう1回、新しいガバナンスを考えるようにしないと。ガバナンスをいきなり使うと、すでにある種のガバナンスがあるわけだから、それを守るといった話になるのではないか。

### 〈経済基盤を築く〉

- 地域循環型経済をしっかりとやった基盤の上に、外からの人を呼び込んでいるところが、強い地域だと聞いた。そうしたことがちゃんとあった上で、ふるさとの大切さが生まれてくるのではないか。
- 貨幣はそれほどなくても、それ以外の、稼ぎじゃない仕事で成り立っている世の中だってあり得るのではないか。

### 〈人の流動性を高める〉

- 大学生を呼び込んで活動しているが、集めるのが大変である。一番効果があるのは、先輩が後輩を呼んでくる、近所の学生が自分たちの活動を見て関心を示すといった口コミである。また、近くの高校にも声をかけ、具体的にして欲しいことをお願いすると、遊ぶだけでなくそんな事もするの、と言って来てくれる。
- 若者をどうやって活動の中に取り込んで継続的にやってもらえるか。ドイツの地域通貨の中心は高校生である。卒業しても継続的に一緒になってやろうという人たちが出てくる仕組みがある。きっかけがあれば日本でも出来るのではないかと思う。

### 〈若者の定着を促進する〉

- 若者の定着を促進することが一番の課題だと思う。これは非常にゆるやかに考えるのがいいかと思う。地域に魅力を感じて一定時期ステイしてくれる若者や外国人等も含めて定着ととっていいのではないか。
- 若者の切実な部分は、就労にとっても苦勞しているケースが多いこと。生活の基盤は所得に関連するので、定着を促進する際に、一定期間の仕事でも、長期の仕事でも、地域ごとのちょっとした工夫があれば、促進が図れるのではないか。
- 女性に関してのいろいろな政策は進んでいるが、サポート度合いは日本全体では遅いので、子育てしやすい、見守りがしっかりしている等、子育て中の家族や女性も含めて、幅広い感覚での定着をこのプランの中で考えていきたい。
- 定着をしなくても、自由に行き来できたらいいのではないか。夜間人口で考える必要はなく、昼間人口で、あるいは交流人口で考えないと時代に即していないのではないか。定着というのは、そこに簡単に行けることで、そこに留まる必要はないと思う。
- ふるさとづくり青年隊事業で、自分が気付いたことや、やりたいことが生まれてきた人たちが実践する場をつくった。これが、居場所とか交流の場になっているかなと感じている。
- 若者が自分で考えて自分のめざす地域をつくれることになれば、責任を持ってでも地域に定着すると思う。
- 自治体を預かるものとしては、若者にまちに定着していただきたい。兵庫県は広域だが、それぞれのところへ人が残っていただかないといけない。

### 〈生きる拠点としてのふるさとと若者〉

- これは県民生活審議会なので、県が考えないといけないふるさとづくりはこういうものだと姿勢を示す必要がある。
- ふるさととは人々の生きる拠点のような所だと思う。まちづくりはコミュニテ

イづくりに近いが、ふるさとづくりは、拠点をしっかりしたものにしていこうというもの。拠点とした上で、どのような地域の資源を使うか。それは、未来をも考えるといったことになってくると思う。

- 若者論を全体の中でどう位置づけたらいいのか、ふるさとづくりとどう絡むかというところで、この若者論は前に出していきたいと思う。
- ふるさとという言葉、兵庫県のふるさとという概念として、ここで作るべきかと思う。ノスタルジックなものではなく、若い人たちが求めているふるさとをもう少し絞り込むべき。
- 兵庫県での新しい定義をつくるぐらいの提案の方がいいのではないか。新しくやってみようという形の、アクティブで定義自体も参加型にするような表現が浮かぶといいが。
- 今回は、若者論に限って、兵庫県の若者に特化してふるさとを考えるのも1つの方法かもしれないと思う。

#### 〈キーワードや課題の類型化〉

- 兵庫県の中を見ても、いろいろな地域の具体的な取組例があるので、地域や課題を類型化して、それに対して具体的な取組を考えるのも1つの方法ではないか。
- これまで地域活動の事例をまとめる際に、テーマでまとめることが多かったが、今回、キーワードを類型化していたのは画期的だと思った。どういったしかけで、どう活性化していったのかという観点で類型化して、その中からどのようにすれば、しかけが有効なのかを拾っていくような形で考えることが、非常に重要なのではないか。
- 兵庫県全体のカルテがなければ、どこに何があって、何が欠けているのかよく分からない。今、地域がどういう状況にあって、生活に不便があるのかといった辺りを類型化して、課題を抽出したら、ヒントとして活用できるのではないか。
- 地域の状況の説明が書いてある兵庫県全体の見える地図があれば、状態が良く分かっていいと思う。
- ここはこうした方が町として活かしていけるとか、ここは田んぼがまだ健全であるといったような形の企画を県でしていただいたらどうか。

#### 〈情報を活用する〉

- 成功だけではなく失敗も含めて、今までの取り組みを具体的に情報提供することによって、何かをやってみようと思う人のヒントになればいいかと思う。
- 施策展開を検討していく中で、県下で進めていくのは難しいところであり、多くの場合、美しい理念に走るが、一番大事なものは、ふるさとである兵庫県、地元で何が起きているかという情報を知る、承知することが出来ることがベースになると思う。

#### 〈次回審議の進め方〉

- 成功している事例だけでなく、つまづいたところとか、どうやってクリアしたかということも踏まえ、いろいろな実践事例を情報として提示していただき、

議論していったらどうかと考えている。

- 委員ではないけれども、実践されている方に来ていただいて、活動紹介してもらおう機会を次回設定してみてもどうか。
- 皆さん若者が入ってくることに関心が高く、若者がキーワードかと思う。ぜひ、若者でIターン、Uターンされている若者を呼んでいただきたいと思う。
- ふるさと事業青年隊の中に、IJターンや多様な働き方をしている青年たちが熱意を持って活動している。次回にこの場で意見を聞く場を持たせていただきたい。(事務局)
- 良いことばかり言う人だけでは困る。失敗した話を出来る人も入っていただきたいと思う。

### (3) 参画・協働推進委員会の設置について

- 委員会の設置について、案のとおり了承
- 委員構成について、案のとおり部会長により指名

### (4) 企画県民部参事挨拶

- 本日は、長時間ご審議いただき、お礼申し上げます。
- とても示唆に富んだ、熱心なご意見を多くいただいた。事務局としても、本日いただいたご意見で宿題を果たしたいと思う。
- 若干同じテーマを繰り返している印象はあるが、生きていく上での根幹に関わる大切なテーマだからこそ、解決しにくいものに私たちは挑んでいるのではないかと考えている。
- 社会背景が変わっていったら、人口が減少する局面にも入っている。また、私たちは大きな震災を経験しており、支え合うことの大切さを身にしみ知っている。
- ボランティアプラザや県民交流広場、パワーアップ事業もこの審議会でのご意見を参考に展開していった。こうしていろいろなご意見をいただく中で、私たちがきちっとまとめて、施策にしていかなければならないと肝に銘じた。
- 次回は、若者の人選を部会長と相談しながら進めていき、よい兵庫になるように努めていきたいと思っているので、よろしくお願ひしたい。